第11回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（最優秀賞）】

カシミヤを羽織る乙女

渡辺　惠子・徳島県徳島市

今から二十三年前、父が六十七歳で他界した。納骨が終わり、実家で母と一緒に父の遺品整理をしていると、洋服箪笥の中から女性ものの、いかにも高価そうな紅色のコートが目に留まった。商品札が付いたままで一度も手が通されていないようだった。

「これ、どしたん？　カシミヤ百％やんか。お母ちゃん、こんなええもん持っとったんや」

驚きの声を上げた私に、母は照れ笑いした。

「これはお母ちゃんが結婚してから、初めてお父ちゃんに貰った、プ・レ・ゼ・ン・ト」

母は勿体ぶりながら、経緯を語り始めた。

母は昭和三十二年、父のもとに嫁いできた。父は一人っ子で、母は姑との同居を余儀なくされた。祖母は孫娘の私には、とても優しく接してくれたが、母に対しては人が変わったように冷たく厳しかった。祖母は、父と母と二人だけでの、ほんの数時間の外出でも機嫌が悪く、ましてや泊りがけの旅行など、とても言い出せるはずがなかったという。祖母に気を遣いながらの生活が四十年ほど続き、母は祖母の最期を看取った。

それからしばらくして、父は母の目の前に、百貨店の包装紙に包まれた大きな箱を差し出した。母はドキドキしながら包みを開けると、深みのある鮮やかな紅色のコートが目に飛び込んできた。あっけに取られている母に、父は、はにかみながら言った。

「今までお袋のことでお前に面倒かけたから、罪滅ぼしや。まだ新婚旅行に行けてないから、これ着て、近々有馬温泉にでも行こや」

母は震える手でコートを広げてみると、Ｍサイズだった。その頃の母は、百五十センチ足らずの身長で、体重が六十キロ近くあり、服はＬサイズを着ていた。

「行くんやったら、来年にしよ。今はお義母さんが亡くなって間もないし……」

母の返事に父はがっかりした様子だったが、しぶしぶ納得したようだった。父が脳腫瘍で倒れたのは、その半年後だった。

母は仏壇の父の位牌を見つめながら、悔しそうに呟いた。

「あ～あ、一年かけてダイエットしたら、このコートが着れると思うて頑張っとったのに、いざ着れるようになったら、肝心のお父ちゃんがおらんようになってしもて……」

「きつくて身体が入らへんなんてお父ちゃんに言うの、私のプライドが許さへんわ」

母はそう言いながら、あっけらかんと笑った。無理に強がってみせる母が無性にいじらしくて、私は咄嗟に声が出た。

「お母ちゃん、それ着て、有馬温泉に行こ！　私がお父ちゃんの代わりになったるわ」

躊躇する母を強引に説得し、早々に予約を入れた。今まで一度も経験したことがなかった念願の母娘旅行の実現だった。

当日実家に迎えに行くと、目一杯化粧した母が玄関先で、あのコートを着て、パンパンになったボストンバッグを提げて立っていた。

「一泊やのに、そんなに荷物、どうすんの？」

「そやかて生まれて初めての旅行やから、何をどんだけ入れてええか、わかれへんもん」

その日の母は、修学旅行出発前の中学生のようにはしゃいでいた。

旅館に到着して、まず温泉に入った。親孝行の真似事のつもりで、母の背中の後ろに回った。私が小学生の時に足首を捻挫して、一ヶ月近くの間、毎日母におんぶされて学校に通ったことがあった。その頃の母の、もっともっと厚みがあった背中を思い出し、思わず鼻の奥がツーンとなった。

部屋で母娘差し向かいでの夕食時には、母は日本酒が好きだということも初めて知った。母はおちょこを口に運びながら、酔いも手伝ってか、だんだん饒舌になっていった。

本気でお酒を飲んだら、父より自分の方が強いこと。父はゴキブリ恐怖症で、出没すると父は悲鳴を上げ、ゴキブリが自分の方に飛んで来るのを見た時に、その場で失神してしまったことなど、両親の、私が今までまったく知らなかった一面を垣間見ることができた。

母は最後に、しみじみと言った。

「人生に『また今度』は、ないんやで。先延ばしにしたら、一生後悔するで」

その時私に向けられた母の眼差しは、父への万感の思いが詰まっているような気がした。

あれから長い長い歳月が流れ、とうとう、母の命の灯も消えた。私は、棺の中で安らかに眠る母に紅色のコートをフワ～ッと掛けた。

母の形見に私が貰っておきたかったけれど、悩んだ挙句、やっぱり父に譲ることにした。

お化粧をしてもらった母の顔はツヤツヤでまるで乙女のようだった。母の門出を祝うかのように、カシミヤの輝きが一段と母の顔を際立たせていた。

天国の駅で母の到着を待ちわびていた父は、見覚えのあるコートを羽織る、こんな綺麗な乙女を見て、きっと戸惑ったに違いない。

二人は今頃、どこを旅しているのだろうか。